

【論文要約】2020年度 博士学位論文

**特別養護老人ホームにおける介護福祉職の協働するちからの熟達化に関する研究
—「他者のフォロー」の学びと実践共同体—**

A study on the proficiency of the collaborative ability of nursing care workers in special
elderly nursing homes

-Learning of following others and community of practice -

松永 繁

キーワード：介護福祉士 協働するちから 職場学習 実践共同体 変容的学習

序章 研究の背景と目的

序章では、本研究の背景、研究目的、研究方法について述べた。

まず、研究の背景として、現在、我が国における介護福祉現場では福祉系以外の他分野からの社会人を受け入れるなど、多様な人材が介護に従事している。

「老人保健健康増進等事業介護人材の働き方の実態及び働き方の意向等に関する調査研究事業 報告書」（日本総合研究所 2018）によれば、介護福祉職の前職や学歴、年齢、取得資格と資格教育等の背景が多様であることが示されている。

また、介護福祉に関する資格に関しても、複数の資格と取得ルートがあり、介護福祉職の教育的背景も多様であることが示唆されている（高橋 2016）（牛田 2020）。

このように多様な人材が介護に従事する中、特別養護老人ホームにおける課題の一つとして、介護職員間の「人間関係の悪化」という協働に関する課題が存在する。介護福祉職間の人間関係を悪化させる背景として、介護福祉職個人の人間関係に関するスキル・認識などの行動特性、つまりコンピテンシーが影響していることが先行研究から示唆されている（谷口 2010）（白石・藤井・影山ほか 2012）（高橋 2016）（牛田 2020）。

コンピテンシーに関して、我が国においてはキャリア発達の観点から検討され示されている（内閣府 2003）（厚生労働省 2004）（経済産業省 2006）（文部科学省 2011）。その中で共通して示されているコンピテンシーとして、社会人・職業人として求められる他者と協働していくための能力である。

また、国外をみると、経済協力機構（OECD：Organisation for Economic Co-operation and Development 以下、OECD）は、コンピテンシーとは、知識や技能だけではなく、意思や意欲、態度といった「情動的」な側面にも支えられているとし、それを社会情動的能力と提唱した（OECD2015）（遠藤 2017）。

OECDによると、社会情動的能力とは「(a) 一貫した思考・感情・行動のパターン

に発現し、(b)学校教育またはインフォーマルな学習によって発達させることができ、
(c) 個人の一生を通じて社会・経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力」と定義され、目標を達成する力、他者と協働する力、情動を制御する力を含むとされる。そして、これら3つの側面に関する思考、感情、行動のパターンが社会情動的能力である(遠藤 2017)。また、社会情動的能力は、認知的スキルと互いに影響を及ぼしながら、学校教育以外での家庭や地域といった場面でも培われ、どのような家庭環境や教育環境で育ったのかといった環境因子も社会情動的能力には深く関係していることが示唆されている。

これらの先行研究に基づいて、本研究では、人間関係に関する諸能力を「他者と協力する能力」、「問題を解決する能力」、「他者の意図や感情を理解する能力」、「自己の理解と行動の調整する能力」と4つのカテゴリ化を行い、そのコアカテゴリを「人間関係形成能力」とし、これらを包含したものが協働するちからとした。

以上のことから、特別養護老人ホームにおける協働に関する課題である「人間関係の悪化」の背景には、介護福祉職の社会情動的能力である協働するちからが要因として存在することを述べた。

次に、協働するちからの学習の場・機会について、特別養護老人ホームにおける研修に関する先行研究から検討した。その結果、特別養護老人ホームにおける研修の多くは学習転移モデルに基づいた知識や技術の伝達、獲得を目的とした内容となっており、協働に関する課題については対応していないことが示唆された。

また、先行研究では研修に拠らない実践を通じた経験学習の可能性が、職場学習理論、変容的学習理論、状況的学習理論における実践共同体において示唆されている。

経験学習における学習には、①知識や技術の習得のための学習と②自己変容を伴う学習が存在する(松尾 2011)(立田 2014)ことが示唆されており、「あるテーマにかんする関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」(Wenger2002)の実践共同体の中で、人は学習を行っていく(松本 2013)ことも示唆されている。しかし、介護福祉職の協働するちからに注目し、協働するちからの学習と学習プロセスの検討による協働するちからの熟達化に関する研究は見当たらない。

よって、本研究では、特別養護老人ホームにおいて介護に従事する協働するちからに課題を持つ介護福祉職が、介護福祉職として介護に従事する以前と以後と連続した過程を通して、協働するちからの学習と熟達化のプロセスについて示唆を得ることを目的とした。そして、本研究においては、特別養護老人ホームで介護に従事する協働するちからに課題を持つ介護福祉職の背景の中から、介護福祉士養成課程を持つ専門学校で学ぶ者に焦点を当て、介護福祉職以前と以後と連続した過程を通じた協働するちからの学び、熟達化に関して検討を行った。

第1章 介護福祉士養成課程を持つ専門学校における学生の協働するちからに関する調査研究

第1章では、介護福祉士養成課程を持つ専門学校における学生の「協働するちから」に関しての現状と課題について、介護福祉士養成課程を持つ専門学校（以下、介護福祉士養成専門学校）の教員を対象にアンケートを実施した。

関東信越地域の介護福祉士養成専門学校すべての83校の介護福祉士養成教育に1年以上携わる教員83名（各校1名）を対象にアンケートを実施し、回答を得られた25校を対象に分析・考察を行った。この調査では、「協働するちから」の下位概念として設定した人間関係形成能力に焦点を当て、人間関係形成能力が発達途上の学生の存在の有無、人間関係形成能力が発達途上の学生の特徴と課題について尋ねた。なお、対象者の射程は、先天的な要因により「協働するちから」についての学習ニーズを持つ学生ではなく、学校生活、社会生活を通しての「協働するちから」の学習が十分ではないために「協働するちから」に関して課題を持つ学生である。

結果、介護福祉士養成専門学校において、人間関係形成能力が発達途上と思われる学生の存在が明らかとなった。また、それら学生の特徴として、＜相手との関係づくりができない＞、＜他者との協働が困難＞、＜社会ルールを理解できていない＞、＜他者理解の困難＞、＜状況に応じた行動ができない＞が挙げられた。

そして、自己中心的な世界観により、孤立させる行動を取ってしまうことで、クラスメイトや教員といった他者との関係性が徐々に悪化し、最終的には学校という構成員からの離脱に至ることも示唆された。

第2章 介護福祉士養成課程を持つ専門学校で学ぶ学生の協働するちからに関する課題と支援についての研究

第2章では、第1章の介護福祉士養成専門学校の教員へのアンケート結果を踏まえて、介護福祉士養成専門学校の教員が、人間関係形成能力が発達途上の学生への支援について、質的に明らかにすることを目的にインタビューを実施した。

分析には、内容分析を採用した。分析の結果、まず、介護福祉士養成専門学校で学ぶ人間関係形成能力が発達途上の学生について5つのタイプに整理した。分類は、「Aタイプ 発達障害等が疑われる（診断されている）学生」「Bタイプ 不器用型」「Cタイプ 自己中心行動型」「Dタイプ 孤独型」「Eタイプ 文脈不理解型」とした。

そして、これらの学生に対して教員は、介護現場へ就職後に必要となる他者と協働するために求められる能力の学習につなげることを念頭に、【職業教育】、【学生指導】、【保護者との連携】、【成長へのコーディネート】、【実習支援】、【就職支援】を行っていることが示唆された。

そして、教員の支援は他者との円環的相互作用の中で生じた課題について、学生へ省察を促し、学びにつなげるという経験学習に基づいた支援であることが考えられる。

そして、学生は物事の捉え方といった前提が変容することで行動の修正を行い、協働するちからについての学習につなげていることが示唆された。

これらの結果は、協働するちからを熟達させていくための学習として、経験学習に拠った学びの可能性が示唆されているものと考えられる。

しかし、限られた修学年数の中での教員の支援であるため限界があり、人間関係形成能力が不十分なまま介護現場に移行することとなり、卒後の介護福祉現場においても協働するちからの学びの必要性が示唆された。

第3章 特別養護老人ホームで介護に従事する現任介護福祉職の「協働するちから」に関する研究

第3章では、介護福祉士養成専門学校で学ぶ人間関係形成能力が発達途上の学生の介護現場へ移行後に考えられる協働に関しての課題と学びの可能性について、示唆を得ることを目的に検討した。

方法は、特別養護老人ホームで介護に従事する介護福祉職を対象にして「介護福祉職の協働するちから」の現状と課題についてインタビューを行った。インタビューは、3か所の特別養護老人ホームに勤務する介護福祉職6名を対象に実施した。分析は、質的分析方法であるSCAT（Steps for Coding and Theorization）を採用した。

結果、協働することに課題を持つ介護福祉職は、①自己中心的な行動をとる、②コミュニケーションを拒否する、③プラスの業務をこなせない④本音が話せないという特徴が示唆された。

しかし、一方で、自身が引き起こす失敗やトラブルを乗り越えながら仕事を続けていることも示唆された。その背景としては、本人が持つ協働するちからの強みの部分を活かすことで、他者からの孤立が回避されていた。そして、介護実践をとおして課題を抱えながらも協働するちからについて学習していることも示唆された。

第4章 介護福祉職の実践共同体を通じた変容的学習に関する研究

第4章では、介護福祉職の「協働するちから」の熟達化につながる学習について、変容的学習理論及び実践共同体の概念を用いて考察を行った。

3か所の特別養護老人ホームに勤務する介護福祉職6名を対象にインタビューを実施し、SCAT（Steps for Coding and Theorization）により分析をおこなった。結果、特別養護老人ホームにおいて、互惠性規範・互惠的關係性を重視する介護福祉職が実践共同体を形成し、「他者のフォロー」の実践を行っていることが示唆された。そして、実践共同体での「他者のフォロー」の実践をとおして変容的学習が行われ、協働するちからの学びにつなげていることが示唆された。

実践共同体での実践をとおして、「他者のフォロー」という意味パースペクティブの変容がなされる。また、①同僚の立場に立った行動ができる、②同僚を大切にした振

る舞いができる、③間接業務を率先して行う、④段取りが組めるという4つの意味スキームを実践共同体における「他者のフォロー」の実践を通して学習し、形成していくことも示唆された。そして、介護福祉職は、実践共同体における経験が、他者のフォローに有効なものかどうかを4つの意味スキームに基づいて省察し判断する。そして、有効と判断された場合、経験した具体的な視点や方法、行動が強化・追加・修正され、他者のフォローに関する実践知としていくことが考えられる。

そして、協働するちからの熟達化は、時間的経過に合わせて一方向的に不可逆的に進むのではなく、一旦停止、留まり、退行といった過程も含まれ、これらの過程も協働するちからの学びにつながる経験であることが示唆された。

終章 総合考察

終章では、各章で検討した研究結果と考察を総合的に考察し、最終的に得られた知見と成果をまとめた。また、本研究の限界と課題、本研究の結論を述べた。

まず、第1章、第2章、第3章の検討から協働するちからの学びについて、経験学習による学びの可能性が示唆された。

第4章では、介護現場における協働するちからの具体的な学習と学習プロセスを検討する目的で、介護福祉職の実践共同体をとおした変容的学習に関する研究を行った。結果、互惠性規範・互惠的関係を重視する介護福祉職が実践共同体を形成していることが示唆された。

そして、実践共同体における介護福祉職自身の「他者のフォロー」の実践をとおした変容的学習により、意味パースペクティブの変容、意味スキームの形成、意味スキームに基づく自身の行動・視点の強化・追加・修正による他者のフォローに関する具体的な実践知の獲得という協働するちからの学習と熟達化につながっていることが示唆された。

次に、協働するちからの熟達化のプロセスは、実践共同体における自身の「他者のフォロー」の実践をとおして、経験が他者のフォローに有効なものかどうかを判断する4つの意味スキームに基づいての省察による、意味スキームにつながる具体的な行動・視点の強化・追加・修正により、他者のフォローに関する実践知を学習・獲得していく。これら4つの意味スキームに基づいて省察し、意味スキームにつながる具体的な行動・視点の強化・追加・修正という一連のプロセスを繰り返していく変容的学習により、協働するちからの熟達化につながっていることが示唆された。

また、協働するちからの熟達化は、時間的経過に合わせて一方向的に不可逆的に進むのではなく、一旦停止、留まり、退行といった過程も含まれ、これらの過程も協働するちからの学びにつながる経験であることも示唆された。このことから、協働するちからの熟達化の過程は螺旋を描くような螺旋型熟達化学習の過程であることが示唆された。

結論として、介護福祉士養成専門学校で学ぶ協働するちからに課題を持つ者は、介護福祉職となる以前の学校生活において、学生自身が持つ強みを活かしながら、教員の支援を受けながらトラブルや課題を乗り越え、また、協働するちからの学習を行いながら卒業し、介護現場に移行していく。そして、介護現場への移行後は、協働するちからが不十分なため協働に関する課題が生じる可能性があるものの、自身の協働するちからの強みの部分を活かし、他者との人間関係を維持しつつ、実践共同体の一員として協働するちからの学びを行っていく学習過程が示唆された。

また、介護現場では実践共同体に参加し、実践共同体をとおした変容的学習により意味パースペクティブの変容、意味スキームの形成、他者のフォローに関する実践知の学びを行う。その学習過程は、時間軸に沿って熟達する過程と、一旦停止、留まり、退行といった過程を織り交ぜながら螺旋形の学習過程を歩むという協働するちからの熟達化のプロセスが示唆された。この結果は、協働するちからに課題を持つ他の背景の介護福祉職の協働するちからの学習、熟達化の過程についても示唆を与えるものと考えられる。

最後に本研究の限界を述べる。本研究は、介護福祉士養成専門学校で学ぶ協働するちからに課題を持つ者を対象とし、学校生活・介護現場という一連の過程における協働するちからの学習と熟達化について明らかにすることを目的とした。しかし、本研究では対象者を一貫して追いながら協働するちからの熟達化の検討を行ったものではない。

次に、特別養護老人ホームにおいて、介護福祉職が形成する実践共同体は多数存在し、成熟度・学習内容も多様であると考えられる。

しかし、本研究では質的研究を目的として、互惠性規範、互惠的關係性を重要視する介護福祉職が形成する実践共同体を取り上げ考察した。この実践共同体は、あくまで介護福祉職が形成する実践共同体のひとつにすぎない

また、協働するちからの変容的学習による学習と学習過程について示唆することができたが、これらは職場での実践共同体における学習というフォーマルな学習である。よって、インフォーマルな学習が協働するちからの学習にどのように関連し、影響を与えているのかの検討までは踏み込めていない。

最後に特別養護老人ホームで介護に従事する協働するちからに課題を持つ介護福祉職の全ての背景を取り挙げた研究ではない。よって、他の背景を持つ協働するちからに課題を持つ介護福祉職によっては、異なる結果が出ることも考えられる。

本研究の課題として4点あげる。

1 点目の課題は、介護福祉士養成専門学校で学ぶ協働するちからに課題を持つ学生について、一貫した対象者を養成校での学び・介護現場での学びという一連の過程をとおして検討していく必要があると考える。

2 点目の課題は、特別養護老人ホームにおける、協働するちからの熟達化のための

学習に関与する実践共同体の存在と特徴について、さらに調査対象数を増やし、量的・質的に検討していくことが必要である。そのうえで、実践共同体の類型化、類型化ごとの学習の内容、学習プロセスの検討が必要と考える。

3点目の課題は、協働するちからの変容的学習について、インフォーマルな学習が協働するちからの学習にどのような影響を与えているのかの検討である。

4点目は、特別養護老人ホームで介護に従事する協働するちからに課題を持つ介護福祉職の協働するちからの学びを検討するにあたり、介護福祉士養成専門学校の背景以外の他の背景を持つ協働するちからに課題を持つ介護福祉職についても、介護福祉職以前、以後と連続したつながりの中で協働するちからの課題と学習の検討が必要である。そして、定量・定性データのさらなる収集と分析、考察により、協働するちからの学習と学習プロセスについて、普遍化を目指していくことが課題として考えられる。